

## 佐々木望作 「飽食時代」

<前編>

- 進 よう、研司。やっと退院できたか。コレラ菌は全部退治できたか？
- 淳子 えー！ 研司君、コレラだったの？ ちょっと近寄らないで。まだうつるかもしれないから。
- 齊藤研司 何言ってるんだよ。コレラだったら大騒ぎ。今ごろテレビに出てるよ。かかったのは肝炎だよ、肝炎。
- 恵子 それはうつんないの？
- 研司 おい、人が病気で苦しんで、やっと退院したっていうのに、なんだよ、その言い方。「大変だったわねえ」とか、優しい言葉の一つも言えないのかよ。
- 進 まあまあ。これもひねくれた友情の表現だよ。なあ。
- 恵子 そうそうそう。
- 進 よし！ それじゃあ、学校が終わったら研司の全快祝いをしようぜ。
- 恵子 賛成！ 言い出しっぺの進君のおごり！
- 全員 (拍手)
- 進 しょうがねえなあ。まあバイト代も入ったことだし、おごっちゃいましょう。
- 淳子・恵子 イエーイ！
- 進 じゃあ駅前のシェーキーズでピザでも食おうか。研司、いいか？
- 研司 うん。
- 研司ナレーション 僕は齊藤研司。青春高校3年生。今日は新学期2週間目にして、初めて登校した。伯父の招待で、春休みにインドへ旅行したんだけど、帰国してすぐに発熱。病院へ行ったらビールス性肝炎で即入院。大変な目に遭っちゃったわけだけど、それ以上に、インドで体験したことは、自分の内側に何かの変化を起こさせ、入院中、それはどンドン膨らんでいった気がする。
- (効果音) (レストラン内。ガヤ、BGM)
- 進 それにしてもお前、災難だったなあ。行ってきたのはインドだったよな？
- 研司 うん。叔父さんが商社勤めで、家族ぐるみで行ってるんだ。いとこが同じ年な人で、普通のツアーなんかじゃ行けないような所を連れてってもらったんだ。それで、1回だけどうしてもノドが渴いて、ジュースやコーラも買ってなかったんで、水を飲んじゃったんだ。
- 涼子 それが原因？
- 研司 そうらしいんだ。
- 恵子 いとこもかかっちゃったの？
- 研司 それがあいつはピンピンしてるんだ。不公平だぜ。

進 本当に災難だったなあ。で、どうだったんだい、インドは？

研司 うん。いろいろ考えることがあったなあ。

涼子 硬い話はイヤよ。面白い話にして。

研司 面白くなくなつて大切なことはあるよ。

涼子 あたしだったら、やっぱりアメリカとかヨーロッパに行くなあ。

ウエートレス どうもお待たせしました。

(効果音) (皿を置く音)

進 まあ話はあとにして、まずは食べようや。ではコーラで乾杯と行くか。(せき払い)えー、我らが研司君の退院を祝って乾杯！

全員 乾杯！

恵子 進君のおごりだと思うと、ますます食欲わいちゃうわね、涼子。

涼子 そうね。がんがん食べよ。

進 おいおい、言っとくけど、これ以上は追加注文ナシだぜ。バイト代全部吸い取られちゃあかなわないからな。

恵子 えー、それならもっと大きなのを注文しとけばよかった！

進 どうせ帰りにアイスクリームでも食べるんだろうから、こんなもんで十分だよ。

恵子 それもそうか。

4人 (笑い)

涼子 アイスクリームって言えばさあ、駅の裏っ方のお店、こないだオープンしたの知ってる？

恵子 え、ほんと？

涼子 それでさ、開店記念でサービスしてるの。こんなに大きいのよ。

恵子 すごい。

涼子 ねえねえ、帰りに寄ってこない？

進 ほら、予言的中だ。

涼子 うるさいわねえ。

恵子 涼子ったら、「太る太る」って気にしてるくせに、全然行動が伴わないんだから。

涼子 それは言わないで。せめて全部食べてからにして。

恵子 これじゃいつまでたってもダメなわけね。

進 おい研司、さっきからあまり食ってないなあ。まだ体の調子悪いのか？

研司 いや、大丈夫。ちょっと考え事してたもんだから。

進 楽しくやろうぜ。今日はお前が主役なんだからな。

ナレーション そう、体のほうはもうすっかりよくなった。でも、なんかみんなと楽しく食事する気にはなれなかったんだ。それはインドで見たことを思い出してしまったからだ。インドは町の中でも、少し外れたところに行くと、もうそれは日本に住んでいる人間には理解できないような貧しさがあるんだ。一度、そんな子供たちが

らお金をせがまれて、かわいそうに思って、あげようとしたら、いここに止められた。そんなことをしても何の解決にもならないし、彼らのためにもならないからと。道端にはグッタリとして動かない子供もいた。今ごろはもう死んでしまったのかもしれない。テレビでアフリカの飢餓のもっとひどいのを見たことはあったけど、あまりショックはなかった。自分とは関係のない遠い世界のことのようで。でも今回、目の前に見せつけられたあのインドの光景は、大きなショックだった。なんとというか自分の無力さを感じさせられ、入院中もそのことばかり考えていたんだ。“自分はこのままでいいのだろうか？ 何かできないのだろうか”って。

(効果音)

(帰りの電車の中。電車の走行音)

恵子

今日、どうしちゃったの？ 肝心の研司君が浮かない顔しっぱなしだったから、なんとなくシラけちゃった。

研司

うん。ごめん。

恵子

なんか研司君らしくない感じよ。

研司

ねえ、恵子は何か必要なものがなくてすごく困ったとか、我慢したとかっていうことあった？

恵子

え？ そうねえ。高望みすればきりがないけど、必要なものは大体あるんじゃないかしら。

研司

大体か…。でも、おれたちって食べたいときにはいつでも好きなもの食べられるし、ステレオやビデオ、バイク、ワープロ、それに着てるものも、ずいぶんぜいたくじゃないかな。ほら、世界史の藤田先生が言ってたろ。おれたちは今、空前の「飽食時代」に生きてるんだって。

恵子

「ホウシヨク」？ ああ、あの“食べ物に飽きる”っていうの？ それで「太平洋戦争中は日本中が餓えていた。それに比べて君たちは」って十八番が始まるんでしょ。だけどわたしたちは今の時代しか知らないわけだし、それに、そのくらいはなきゃ、今の世の中楽しく生きてゆけないわよ。

研司

でもさあ、現実に世の中には、今日食べるのにも困っている人がたくさんいるんだぜ。

恵子

それはそうだけどお、でもそんなこといちいち気にしてたら、ちっとも楽しくないわよ。

研司

本当にそれでいいのかなあ。

恵子

だってわたしたちにどうしようもないことでしょうか？ それよりも楽しめるうちに楽しんでおこなきゃ、この灰色の受験地獄、乗り切れないわよ。それにしても、あ～あ受験か。もうすぐね。

(効果音)

(電車が止まってドアが開く音)

恵子

じゃ、またあした。

研司                    じゃね。  
(効果音)                (ドアの開く音)  
研司                    ただいま。はいこれ、進路指導の三者面談の案内だって。  
母                        ああ、いよいよ研司も受験ね。少し出足が遅れたけど、すぐ取り戻せるわよね。  
                             全く、お義兄さん<sup>にい</sup>ったら、大切な時期なのに、インドなんか呼んだりするから。  
                             でも研司は文科系私立、目指すところも決まっているから、大丈夫ね。  
研司                    そのことなんだけど、…おれ、大学より英語の専門学校に行きたいんだ。  
母                        何言ってるの。冗談はやめなさい。  
研司                    冗談じゃなくて、本気。  
母                        英語勉強して何になるつもり？  
研司                    おれ、入院中にずっと考えてたんだけど、将来貧しい国の人々を助ける仕事  
                             に就きたいんだ。インドでは、おれと同じくらいの人たちが、今日食べるのも困  
                             っているのに、自分はこんなノホホンと生きていいのかって思うんだ。外国で  
                             働くにはまず英語だろ？ だから英語の専門学校へ行ってみっちり…。  
母                        何バカなことを言ってるの。自分の一生のことなのよ。もっと真剣に考えてもら  
                             わなきゃ困るわ。  
研司                    真剣だからこう言ってるんだよ。不まじめでこんなこと言えないだろ？  
母                        いいえ、そんな一時的な感情ではダメです。後で必ず後悔するわよ。  
研司                    後悔なんかしないよ。それに病院でずっと考えてたって、さっき言ったじゃない  
                             か。  
母                        第一、こんな大切なこと、相談もなしにいきなり言われても、お母さん納得でき  
                             ません。  
研司                    だから今こうやって相談してるんだろ？  
母                        相談じゃないでしょう。わたしの言うことにちっとも耳を貸そうとしないじゃない。  
研司                    お母さんこそそうだよ。「相談しろ」なんて言って、結局自分の考えを押しつけ  
                             てるだけじゃないか。そんなの、親のエゴだ。  
母                        とにかくダメと言ったらダメです。お父さんも何とか言ってください。  
父                        まあ研司、もう少しよく考えてみなさい。  
母                        お父さん、もっと強く言ってくださいよ。大体あなたのお兄さんがいけないんで  
                             すよ。受験前の大切な時に、インドなんか来いなんて言うから。  
父                        「外国を見てくると、将来就職のときにも有利だ」って、言っていたろ、お前だっ  
                             て。  
母                        いいえ、わたしは反対でしたよ。外国と言ったって、アメリカやヨーロッパならま  
                             だしも、インドなんて…。  
研司                    ほらこれだ。お母さんみたいに、そうやって発展途上国をバカにするような考  
                             え方が、問題の根本なんだよ。

母 まあー。母親にお説教をするつもり？ それが親に向かって言う言葉ですか。  
研司 もういいよ。分かったよ。  
母 何が分かったの？  
研司 いくら話しても、お母さんには分かってもらえないってこと！ もういいよ。  
母 ちょっと待ちなさい。研司！  
(効果音) (ドアを閉める音)  
研司モノローグ (ため息)みんな結局自分が大切なんだ。あ～、どうしたらいいんだろう。…

<後編>

ナレーション インドから持ち帰った病気が治って1か月あまり。あれ以来、進路のことを口に出すと、いつでもおふくろとケンカ。最近はまだ家にいるのが苦痛だ。とって、大学よりも英語を勉強して、発展途上国のために働くなんて話には、友達も真剣には相手になってくれないし。みんながみんな、自分のことばかり考えて生きているように見える。この不満を、とうとう僕はクラスで爆発させてしまった。それは藤田先生の世界史の時間だった。

(効果音) (クラスのカヤ)(戸の開く音)

クラス委員 起立。礼。

(全員) おはようございます。

藤田先生 はい、おはようございます。えーと、今日は…そうそう、産業革命後のヨーロッパ諸国の“植民地政策”からでしたね。産業革命以前から、各国とも競って植民地政策を採り、その領地を拡大してゆきました。特に産業革命後は、植民地から安い原料を輸入し、そして工業製品を植民地に輸出したわけですね。植民地の側からすると、例えば原綿を、加工前の綿ね、その原綿を100円で売ったとすると、それでできた製品を200円で買わされる。つまり先進工業国による“搾取の構造”が出来上がったわけですね。残念ながら今日もこの構造は変わってはいません。

涼子 (ヒソヒソ声)もういいよ。早く先に進まないかしらね。

恵子 わたしたち、ツイてないわよ。隣のクラスの山下先生はバッチリ受験対策やっ  
てんだって。

藤田先生 その2人、何かソコソコ言ってるんですか？ 言いたいことがあるなら、言ってご  
らんなさい。

涼子 いえ、あの一、なんでもないんです。

藤田先生 いいわよ。怒ったりしないから言ってごらんなさい。

恵子 (小声で)ねえ、言っちゃいなさいよ。

涼子 でも…。

恵子 もうじれったい。はい、先生、そのう、なんて言いますか、先生の教えているこ

とも大切とは思いますが、エー、現実に切実な問題もあるわけですし、…

藤田先生 要するに、受験に役立つ授業を、ということね？

恵子 はい、まあ…。

研司 僕は今のままの授業を続けてほしいと思います。

進 点数稼ぎするな。

研司 そんなんじゃないよ。受験、受験って、みんな自分のことばかり考えてるんじゃないか。そんなことよりもっと大事なことがあるんじゃないのか？

進 何が大事なんだよ。

研司 自分のことだけじゃなくて、もっと広く見る目を向けるべきだって言ってるんだよ。

進 人それぞれに大事なこと、必要なことっていうのはあるんだぜ。それでいいだろう。今ここにいる大勢にとっては、受験勉強が大切なんだから、そう言っているだけだろう。

研司 じゃ聞くけど、みんな、何のために大学に行くんだよ。

進 そんなの、おれたちの勝手だろ？

恵子 もうやめてよ。先生、授業続けてください。

藤田先生 二人が話していることは大切なことだわ。研司君、続けて。

研司 だからあ、受験が大切だって言うけど、目的がはっきりしなければ、意味がないんじゃないかなあ。

進 それは一人一人が自分で考えることで、お前にとやかく言われる必要はねえよ。そうだろ？

研司 そんなことないよ。世界には、毎日食べるにも困っている人がたくさんいるんだ。おれたちはいつでも食べたいものを食べられるし、着たいものも着られる。それなのに、ただ自分のためだけに生きるなんてできないだろう。

進 それじゃあ、お前はどうするんだよ。

研司 おれは、なんとかそういう国の人たちを助ける仕事に就きたいと思ってるよ。

進 本気かよ。

研司 ああ。

進 信じられないね。

研司 自分のことばかり考えるやつには、信じられないだろうな。

進 まるで聖人気取りだな。こっけいだぜ。

研司 なんだよ。お前たちの口から出ることと言えば、いつも食べ物や着るもの、またあれ買ったのこれ買ったの、そんな話ばかりだろう。頭ん中はくだらないことしかないんじゃないのか？

進 いい加減にしろよ！ お前は世の中のことなんかちっとも分かつちやいないんだ。

研司                    そっちこそ、目先のことしか考えてない、頭カラッポじゃねえか。

進                        なんだと？ もう頭に来たから言ってやるけどなあ、お前、自分を何様だと思っ  
てるんだ？ さっきから偉そうに。お前、今まで一体何をしたって言うんだ。人の  
ことを自分中心だのなんのって言うけど、自分だって同じだろう。お前は、  
そうやって貧しい国の人を助けようとしている自分に酔っているだけだよ。結  
局、お前が人のことを言うのと同じように、人のこと考えてるふりをして、自分  
を満足させてるだけなんだよ。

研司                    何～？ もう一回言ってみろよ。

進                        ああ、何度でも言ってやるよ。お前はなあ…。

藤田先生               はいストップ、そこまで。これ以上は単なるケンカになってしまうわ。ただ、二人  
が論じ合ったことはとても大切なことだから、みんなも自分自身に当てはめて、  
よく考えてみてください。

                              それじゃあ授業に戻りますよ。それから受験対策については、先生も全然考え  
てないわけじゃないから、もっといろいろ考えてみます。

ナレーション           僕の心の中は、怒りと同時にショックも感じていた。自分は正しいんだという思  
いと一緒に、進の最後の言葉は、凶星のようだった。しかも、おふくろとケンカ  
した時に、僕が言ったのと同じことを今度は僕が言われてしまった。人のことを  
考えてるふりして、実は自分を満足させている。本当はそうなんだろうか？ そ  
う思うと、少し自信がなくなってきた。

(効果音)                (学校の廊下、ガヤ)

恵子                    ねえ研司君。最近の研司君、変に堅苦しくなったと思ってたけど、真剣だった  
のね。

研司                    いやあ、そんなことないよ。

恵子                    研司君の言うこと聞いてたら、なんか、本当に自分は何も考えないで生きてき  
たんだなって、ちょっと恥ずかしいって感じ。

研司                    そんなこと言われたら、こっちが恥ずかしいよ。

恵子                    でもね、研司君。進君のことだけどね、彼…。

藤田先生               あ、研司君。ちょっと話があるから来てくれる？

ナレーション           それは藤田先生だった。先生はなんでもクリスチャンだとかで、ほかの先生と  
はどっか違っていた。何ていうか、受験のための授業じゃなくて、一人一人に  
心を開いてぶつかってくるような教え方が、僕は好きだった。さっきの進むとの  
衝突も、その先生の前で、僕の考えを聞いてもらいたかったからかもしれない。

(効果音)                (戸を閉める音)

藤田先生               今日はずいぶん進君とやり合ったわね。

研司                    ええ、まあ。

藤田先生 どう、後味は？

研司 なんていうか、あまりすっきりしません。

藤田先生 どうして？ 言いたいことを全部言えたでしょう？

研司 それはそうなんですけど。

藤田先生 理由を当ててみましょうか。進君の言ったこと、本当は凶星だったんでしょう。

研司 うーん。そう…かもしれないですけど。でも先生は、僕の言うこと、間違っているといますか？

藤田先生 ううん、かえって感激した。今どき骨のある学生だなんて思うわよ。

研司 なんか照れくさいな。

藤田先生 デモね。進君の言ったことも正しいと思うわ。

研司 どういうことですか？

藤田先生 研司君のその情熱は、本当にすばらしいと思う。でも人のために働くということは、とても難しいことよ。

研司 僕には無理だってことですか？

藤田先生 そうは言ってないけど。例えば、具体的にこれからどうするの？

研司 まず、英語をモノにするために専門学校へ行くつもりです。

藤田先生 ご両親は？

研司 母が大反対。毎日ケンカです。

藤田先生 それで余計意地を張ってるのね。

研司 先生も反対ですか？

藤田先生 そうねえ。反対じゃないけど、もう少し考えてみなきゃいけないことがあると思うんだ。

研司 え？ というと…。

藤田先生 研司君が将来その方面で働くとして、どんな団体、機関があるか、そしてどんな働きをしているか、知ってる？

研司 それはこれから…。

藤田先生 働くと言ったっていろいろあるでしょう。食糧供給、医療、教育、どの分野で原楽かによって、する勉強も違って来るでしょう。そのことはどう考えてるの？

研司 それもこれから…。そうか、意欲だけではどうにもならないってことですか。あのう、先生はクリスチャンだって聞いたんですけど…。

藤田先生 ええ、そうよ。

研司 クリスチャンとして、先生は僕の考えてること、どう思いますか？ 本当のこと言ってください。

藤田先生 オーケー。じゃ言うわね。聖書にこんな言葉があるの。「人がその友のために命を捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」

研司 命を、捨てる？



藤田先生           そうよ。研司君、一番愛している人を思い浮かべて。だれでもいいわ。その人のために、命を投げ出すことができる？

研司                 それは…。

藤田先生           具体的に、いろいろと準備する前に、先生、これが一番大事なことだと思う。わたしの大学時代の友達も、今、宣教師のご主人と一緒にバングラディッシュに渡って、医療伝道をしてるけど、この聖書の言葉読むたびに、あの人のこと思い出すのよ。

研司                 「友のために命を捨てる…」ダメだ、僕。先生、どうしたらそうなれるんですか？

藤田先生           うん。一度先生の通ってる教会に来てみない？ じっくり話そ。

(音楽)               (静かな心の高まりを感じさせるもの)

ナレーション       あの時ほど、自分自身の心の内側を探られたことはなかった。気負い立って、カッコいいことをしようとしていた自分の重い上がり手を、イヤというほど思い知らされた。あれから数か月、僕の心から、あのインドの人々の姿は消えない。その姿にダブって、あの「友のために命を捨てる愛」という言葉が、日に日に重くのしかかってくる。その愛を自分の中につかむこと、すべてはそこから始まるんだ。——今、僕はそんな気がしている。

<完>